

弾直樹が、明治3年（1870）9月に興した王子滝野川の製革、製靴所も、その2年後の1月に移転した、浅草橋場の工場（現、東京都人権プラザ付近）にしても、どんな様子であったのかは、資料がないので、想像するしかない。

弾の事業は、移転間もない12月には、信用不安から経営難に陥り、止むなく工場を二分、製靴部門は亀岡町一丁目14番地（現、今戸一丁目 都立台東東商業高等学校の内）の自邸内に移して、生産を続けることになったから、きびしい状況である。

製革部門も三井組の資本が入り、弾・北岡組と改組、工場も地方橋場1373番地（現、荒川区南千住三丁目 東京ガス千住工場の内）に移され、再出発することになったのである。弾直樹にとって、新しい時代の波を人一倍受けながらの創業は、苦闘の幕開けでもあったのであろう。

二分された後の『弾・北岡組製革所』も、自邸内に移された『弾製靴所』も、僅かだが資料が遺されていて、往時の佇まいぐらひは窺えるのでありがたい。

『皮革産業沿革史 上巻』（東京皮革青年会 昭和34年刊）に「浅草亀岡町の弾製靴所」という銅版画（122頁図版）が載っているので、ご覧いただきたい。（写真参照）



浅草亀岡町の弾製靴所

出典については明らかにしていないが、和綴じの小冊子『東京商工博覧』からの転載ではなかろうか。

より立体的に見ていただくには、沿革史前頁の「弾左衛門役所絵図」を重ね合わせて見ていただくと、靴工場がどこにあったのかなど、深読みができるのでおすすめしたい。沿革史の図版は印刷が薄く鮮明さに欠けるが、出典は『部落解放と弾直樹の功業』（高橋梵仙報告 昭和11年刊）である。この絵図は筆者所蔵とあるが、はたして今も、この世に存在しているのか心配である。

『弾・北岡組製革所』の銅版画も、沿革史の134頁に載っている。何坪ぐらひあったのか、広大な広さを感じる絵である。出典は『東京名家繁昌図録』（日本実業史博物館蔵）とあるが、これは全ての頁を見たい図録である。

この地方橋場は、北岡組以外にも『谷沢製皮場』（資本金1万円）や、神田の『村上勇雄商店』の靴工場（府下南千住元地方橋場1264番地）などがあつた地域である。

（この項続く）